©沖縄タイムス　2016年07月15日　朝刊30面　記事数：1/1　<1/1枚>
ここにいるよ　沖縄子どもの貧困（５４）＝第４部　支援の現場から（１７）　子ども食堂（６）

規範押し付けず育む

ここにいるよ
沖縄 子どもの貧困

第４部 支援の現場から〈17〉

54

子ども食堂⑥

「社会に巣立つ後押しを」

「やったー、きょうはカレーだ」「おかわりしてもいい？」。うるま市与那城屋慶名の高台の住宅街に建つ屋慶名児童館。夏空の下で遊んでいた子どもたちが食堂に元気よく飛び込んできた。

6月から週1回、土曜日に子どもと大人が一緒に昼食を食べる「まんぷくや」を始めた。児童館に遊びに来る小中学生や学童クラブの子どもなど、毎回約40人が利用する。家庭の経済状況などで選抜せず、児童館に来た子は誰でも食べられる。約15キロ離れた街に引っ越したにもかかわらず、毎週自転車で通ってくる中学生もいる。

気になる男子についての「女子トーク」に興じたり、スタッフに自作のなぞなぞを出題するなど、にぎやかに食卓を囲む。5、6人が座る一つのテーブルには必ず大人が寄り添い、一緒に食べる。おなかを満たした子どもの口から思わず本音が漏れることも多い。準備や後片付けを毎週手伝う子どももいる。

森根明日向館長は「家でいつも独りでごはんを食べる子や、そもそも昼食が用意されていない子もいた。児童館で何とかできないかと考えた」と説明する。内閣府予算を活用した市の事業で、子どもの居場所として食事提供がスタート。「おなかも心も満腹になってほしい」という願いを込め、「まんぷくや」と名付けた。

■　■

屋慶名児童館は指定管理者のNPO法人りんく・いしがわが運営。同じく指定管理者になっているみどり町児童センター、石川児童館と合わせ、市内3館で無料の食事提供を始めた。

「まんぷくや」オープンを前に、職員やボランティア希望者、地域の大人たちが集まり、課題を話し合った。「いただきますって言わない子もいるよね」「毎日独りで食べるから言う相手がいない」「子どもが悪いわけじゃない」。そんな議論が交わされた。いきなり規範意識や礼儀作法を押し付けず、実際の様子を見て関わり合いながら、少しずつ大人の思いを伝えていこうと意見がまとまった。

7月のある日、昼食を終えた女子児童たちが「まんぷくや」コーディネーターの與古田葉子さんに「手、出して！」と声を掛けた。「え、何だろう」と戸惑う與古田さんの手首に、子どもたちはカラフルな糸を編んだ手作りのリストバンドを器用に巻き付けた。「いつも、ご飯ありがとう」。思いがけない感謝の言葉。與古田さんは「こちらこそありがとうねー」と喜んだ。

■　■

森根館長は「厳しい家庭環境の子もいて、一概に怒ったり、否定したりできない。生活の基礎的な部分も支えていく必要がある」と話す。10～20代になっても狭い地域だけで暮らす例も多く、コミュニケーションが苦手な子が目立つという。

「中卒や高校中退で無職のままの若者に寛容な地域性があり、本人たちもそこに甘んじてしまう傾向がある。小中学校時代から慣れ親しめる居場所をつくり、一人一人が育ち、社会に出ていく後押しをしていきたい」

夏休みになると昼食を必要とする子がさらに増える見込み。「まんぷくや」は休館の日曜日以外、毎日オープンする予定だ。

（「子どもの貧困」取材班・田嶋正雄）

＝随時掲載

子どもたちと一緒に食卓を囲む森根明日向館長（左）＝うるま市与那城屋慶名